

医科器械に対する橋田邦彦の見解

勝井 恵子

東京大学大学院

本発表は、東京帝国大学医学部の生理学教授であった橋田邦彦（1882～1945）における「医」をめぐる研究の一環として位置づけられる。

1) 橋田邦彦の生涯

1882年に鳥取に生まれ、漢方医である父を持つ橋田は、幼少期より漢学や陽明学を学び、東洋思想の素養を身につけていった。1901年に上京し、第一高等学校、東京帝国大学医科大学を経て、生理学研究に従事することになった橋田は、「生きていることは何か」という問いを抱えるようになり、その答えを求め『正法眼蔵』研究にも着手した。1921年には『蛙皮電動性に関する研究』で医学博士号を取得し、その翌年からは生理学教授として、戦後を代表する医学者を数多く育成した。

また、橋田は学外での活動にも力を入れ、『碧潭集』（1934年、岩波書店）や『空月集』（1936年、岩波書店）といった、橋田の主著といわれる2冊を出版している。

そして、1937年に第一高等学校校長に就任し、1940年には第二次近衛内閣の文部大臣に就任した。1943年に文部大臣を辞任した後は、教学錬成所所長を務めたが、終戦を迎え、A級戦犯に指名された橋田は、1945年9月14日にGHQの召喚前に服毒自決した。

2) 「医」の論者としての橋田への着目

戦後、橋田については公然と議論される機会はほとんど得られず、弟子どうしですら橋田のことを話す際は声をひそめたという。したがって、橋田に関する先行研究は少なく、従来の研究においては、教育行政家としての橋田や科学論者としての橋田、また『正法眼蔵』研究者としての橋田が主として取り上げられるのみであった。

しかし、演者は、橋田が著作の中で「医」に対する考察を執拗に行っている点に着目し、修士論文にてその構造を明らかにした。この作業は、橋田の思想形成史や、研究対象としての橋田像そのものを根源的に捉え直し、橋田邦彦の思想の全貌を明らかにするための一助となると考える。

3) 医科器械に対する橋田邦彦の見解

ところで橋田は、自身の生理学研究を通じ、「日本の生理学の樹立」を目標としていた。この目標は、「日本の生理学」から「日本の医学」、そして「日本の科学の樹立」へとその射程が広げられたが、特に「日本の医学の樹立」という目標に対して橋田は、医道会（1930年）、日本医学研究会（1935年）、医育刷新協議会（1942年）などの会合において中心的役割を果たし、情熱を注いでいた。そのなかで、1928年の医科器械学会5月例会にて、橋田は自身の医科器械に対する見解を述べている。

橋田は、自然科学分野の学問が独立するにあたり、まずは器械を自給自足でまかなえるようにしなければならぬと考えていた。ヨーロッパより器械を取り寄せなければ研究が成立しない間は、たとえ日本人研究者が研究をしたとしても、それはヨーロッパの出店にしか過ぎないとしていた。橋田にとって器械とは、たとえ同じ種類であっても、国によってそれぞれの特徴を持つものであったのだ。したがって、研究を日本の学問として成立させるには、まずは日本において日本風の器械を十分につくることが肝心であるとしたのだ。

しかし橋田は、日本においては器械の自給自足が、すなわち日本風の器械の製造が十分にできない状況にあると捉えていた。その原因として、日本製の器械そのものへの需要の少なさや、職人氣質の欠落などを挙げている。この状況について、いかなる器械づくりも、日本人である以上、日本のためになるということ、日本人として同じ言葉を使って共生している人間のためになるということが背景になれば、行き詰まった器械の進歩発展が望めると橋田は主張している。そして、互いに日本独特の考案によるものをつくり、日本人独特の使用法を持ち、日本人独特の思考で研究に取り組みれば、日本独特の学問が成立すると橋田は考えていたのだ。